西表島における森林の保健休養機能に関する研究（1）

——森林レクリエーション利用者のアンケート調査から——

琉球大学農学部　○新　本　光　孝
砂　川　季　昭

はしがき

最近の社会経済の発展にともなう都市生活環境の悪化，各種の公害問題の発生等を契機として，森林地帯の保健休養的利用，学術研究に供すべき貴重な動植物等の保存など自然環境の保全に対する国民的関心が高まってきた。とりわけ国民生活における所得の向上，余暇の増大および交通機関の発達などにより，森林におけるレクリェーションが高まり，自然休養地としての森林の保全，開発，利用の面でいろいろな問題が生じてきている[1]。

ところで，西表島は琉球列島のなかでも亜熱帯的自然景観をほぼ完全に保有する唯一の島であることから，沖縄の本土復帰とともに森林の一部が国立公園に指定され，その自然を求めて野外に憩う人々が，最近，急激に増大している。このような情勢にかんがみ，西表島における森林レクリェーション利用者の実態調査および保健休養資源の調査をおこなった。すなわち西表島の森林の保健休養的機能を総合的，体系的に把握し，保健休養のためにとくに重要な森林の施業方針等の施策の基本的なあり方を明らかにしようとするものである。

西表島の概況

西表島は，鹿児島から約1,200*km*，沖縄本島から約430*km*南西方の八重山群島中央部にあって，北緯24°15′～25′，東経123°40′～55′の地点に位置している。周囲75.48*km*，面積は29，250*ha*，八重山群島の中で最大の島であり，琉球列島の中では，沖縄本島につぐ。島の約90%が山岳丘陵地帯で，熱帯・亜熱帯の植物によっておおわれ，昼間もなお暗く，うっそうと茂るジャングルをなしている。[2][3][4]

同島の村落は，大原，大富，古見を中心とする東部地区と上原，祖納，白浜を中心とする西部地区に集中しており，車輌の通行可能な道路や橋はいたって少なく，陸上の交通からみると東部と西部地区は，それぞれ独立しており，相互の経済的，社会的交流が少なく，古くはいわゆる陸の孤島であった。昭和49年に東部（大富）から古見，高那経由で西部（船浦）に至る北岸道路の開設に手がつけられた。この道路は，いわゆる復帰記念事業と銘打つ重要道路で，その完成が切望されている。

調査方法

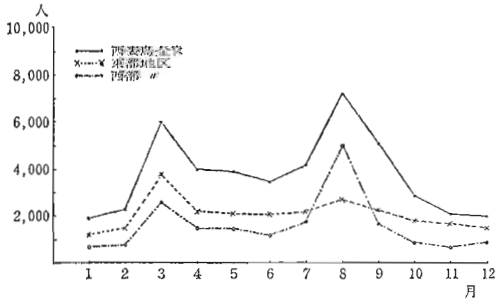
島の森林レクリェーション利用者は，日帰り型と宿泊型とにわけられる。すなわち本土他府県からの利用者が宿泊型であるに対し，地元沖縄本島や石垣島からの利用者は日帰り型の方が多い[1]。今回は，森林レクリェーション利用者の動向把握および四季別の行動分析のため，同島西部地区を対象にとり，①交通手段（石垣島までの交通手段），②吸引圏（現住所），③行動の規模（利用目的，滞在期間）などの項目について，旅館，民宿などを通じてアンケート調査を実施したので，その結果を報告する。調査期間は昭和49年7月20日～同年8月19日の1ケ月間である。

結果および考察

西表島における昭和48，49年の入域者数および昭和49年の月別入域者数を示すと表—1，図—1のとおりである。

表—1　西表島における入域者の数

地区	年次	入域者数	備考
東部	昭和48年 〃 49〃	22,871人 25,161	大原港調べ
西部	昭和48年 〃 49〃	13,109 18,575	船浦・白浜港調べ



図—1　西表島における月別入域者数（昭和49年）

同島は遠かく地で，しかも離島であるため，交通機関はきわめて不便であるが，森林レクリェーション利

用者は年々増加の傾向にある。表—1によると1年間の伸び率は東部地区で約10%，西部地区で約40%となっており，とくに西部地区において著しい伸びを示している。西表島は豊富な資源に恵まれながら，そのほとんどは開発利用されていないのが現状である。その主な理由は，公共，社会施設の遅れによるが，幸い沖縄県の離島振興計画（昭和51年から10ケ年計画）によって道路，空港，港湾，水源開発などの基盤整備および新設が予定されており，その施設整備の完成後は，現在の入域者数を大幅にうわまわるものと予想される。

つぎに，月別の入域者数をみると(図—1)，東部，西部地区ともに3月と8月にピークが認められる。西表島訪問者は学生・生徒の春休み，8月の夏休みを利用しているものがもっとも多く，西表島の森林レクリェーション利用の型態は，いわゆる春，夏を中心とする二季型のタイプであることがわかった。

つぎにアンケート調査の分析をこころみる。調査の結果，239通の回答をえた。それをとりまとめたのが表—2である。

表—2　アンケート調査の結果

項目		%	項目		%
交通手段	本土—那覇		グループの構成	家族	6
	船舶	67		友人	67
	航空機	33		職場	6
	那覇—石垣			学校	2
	船舶	72		地域・団体	0
	航空機	28		ひとり	17
性別	男	59		その他	2
	女	41	グループの規模	2人	47
年齢	10代	31		3〃	44
	20〃	61		4〃	5
	30〃	5		5〃	3
	40〃	2		6〃	0
	50才以上	1		7人以上	1
職業	農林・漁業	0	滞在期間	1泊	14
	卸・小売業	1		2〃	36
	金融・保険	1		3〃	20
	運輸・電気	2		4〃	9
	サービス業	3		5〃	7
	公務員	14		6〃	3
	主婦	1		7泊以上	11
	学生・生徒	56	利用目的	キャンプ	0
	無職	6		自然探勝	27
	その他	16		風景鑑賞	36
発地	北海道・東北	1		学術調査	21
	中部	6		何となしに	16
	関東	42	印象残ったもの	自然の美しさ	44
	近畿	26		周辺の海域	21
	中国・四国	1		島人の親切	21
	九州	4		星砂	14
	沖縄県	20			

①交通手段についてみると，本土・那覇間は船舶67%，航空機33%，那覇・石垣間は船舶72%，航空機28%となって，船舶を利用するものが高い比率を占めている。最近，観光客が大衆化してきたことと，沖縄国際海洋博観会の開催ともあいまって船舶は大型化してきており，その需要はますます伸びていくものと考えられる。②利用者を性別でみると男性59%，女性41%となり，③年齢別では10代31%，20代61%，30代5%，40代2%，50才以上が1%で，利用者は若い男女が圧倒的に多く，10代と20代で全体の92%を占めている。④職業は，学生・生徒が56%を占め，公務員14%，無職6%，サービス業，運輸・電気業の順となっている。⑤夏季の利用者を発地別にみると，関東方面がもっとも多くて42%，つぎに近畿26%，中部6%，九州4%，中国・四国1%，さすがに北海道・東北からは交通不便なこの地は旅行日数もかさむため少なく，約1%にすぎない。地元沖縄の人達は20%に達している。このように西表島の森林レクリェーション利用者の吸引圏は北は北海道から南は沖縄までほぼ全国的におよんでいることが明らかとなった。⑥利用者は，友人グループが67%を占め，その規模は2人が47%，3人が44%と，ほとんどが2～3人づれである。⑦滞在期間をみると，1泊14%，2泊36%，3泊20%，4泊9%，5泊7%，6泊以上が14%で2～3泊を中心とする宿泊型が大きな比重を占めている。⑧利用目的では，風景鑑賞と自然探勝が63%を占め，もっとも多かった。⑨西表島で一番印象に残ったものは，マングローブ林や熱帯・亜熱帯の植物を中心とした「自然の美しさ」と答えた人が44%にものぼり，周辺の海域が美しい21%，海底のリーフの美しさ，海水浴が西表島の魅力となっている。島人の親切さも21%にのぼっている。これらのことから西表島西部地区の森林レクリェーション利用上の性格は風景鑑賞と，自然探勝が中心課題であることが明らかとなった。

従来，亜熱帯地域における森林の保健休養機能に関する研究はほとんどなされていない。そのため今回は，亜熱帯的自然景観をほぼ完全に保有する西表島をとりあげ，まず，森林レクリェーション利用者（宿泊者）の実態調査をおこない，交通構造，吸引圏，行動の規模などを明らかにした。しかし，この調査は利用者のもっとも多い夏季に限ったものであって，四季を通じた分析，日帰り型の分析および各要因間の分析などが残されている。さらに同島の保健休養資源の特徴および森林の風致的施業の問題など今後解明されなければならない大きな問題も残されている。

引　用　文　献

(1) 科学技術庁資源調査会：自然休養地としての森林の保全開発に関する勧告 p. 1　1967

(2) 総理府特別地域連絡局：西表島農業調査報告書 第1編西表島の概況 p. 4　1960

(3) 熊本営林局：沖縄事業区（西表島）の保健休養機能調査について p. 11～22　1975

(4) 田中利典：沖縄の自然〔秘境西表島〕 p. 8～60　1975